

全国有数の漆の産地である茨城県大子町で、特産の「大子漆」の再興を模索する動きが活発だ。漆塗り体験や漆の木の植栽、木に傷を付けて漆を採取する漆かき職人の育成に取り組むNPO法人が活動を開始。工芸作家は伐採後に放置されたいた漆の木を活用した食器を新たに開発した。生産者の高齢化と後継者難、安価な外国産の流入で生産量が減るなか、漆文化の継承と発展を目指す。県北部で山に抱かれた同町中心部。JR常陸大子駅近くの商店街に建つレトロな建物に観光客らが吸い込まれていく。全国の作家が手掛けた漆の器や棚、椅子などが

「大子漆」再興へ動く

茨城のNPO

漆の木で新作の皿

工芸作家

展示販売され、訪れた老夫婦は「ツヤがすてきだね」と目を細めた。

もともと病院だった建物が4月、漆工芸品などの展示販売や漆塗り体験、研修に使う拠点に生まれ変わった。仕掛けたのは昨年11月に発足し、ここに本部を置くNPO法人麗潤館だ。

大子漆は高い透明度や光沢、伸びの良さなどで知られる。江戸時代に水戸藩2代藩主、徳川光圀

10分の1程度に減った。100人以上いた職人は少く、生産者も高齢者し、者育成の研修も始める。

生産量は1988年の1

1,200kgが2012年

には1,870kgまで縮

小。生産者も高齢者し、

多くの大子漆が大部分を占める。しかし、安価な輸入品に押され、茨城の

未利用だった伐採後の漆

の木に大子漆を塗つた皿

を開発した。ごつごつ

た質感が特徴だ。

辻さんが常任理事を務

める日本文化財漆協会

(東京・台東)も町内で

漆の植栽を始めている。

大子漆保存会(大子町)

の会長で、漆かき歴約60

年の職人、飛田祐造さん

は「漆の生産や活用は自

然と向き合の息の長い取

り組み。意欲的な活動が

増えて心強い」と歓迎す

る。

作家も精力的に動く。

漆採取から木地製作、塗

り仕上げまで一貫して行

う木漆工芸作家の辻徹さん

は、「大子漆の知名度

を高めたい」と生活漆器

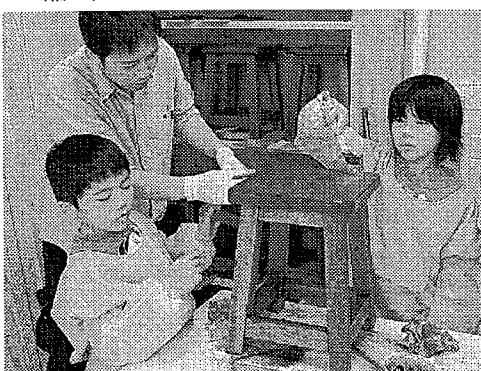
ブランドを立ち上げた。

10年に町中心部の蔵に

展示販売ギャラリー「八

溝塗工房 器而庵(きじ

あん)」を開設。昨年は



麗潤館が開く漆塗りなどの体験講座には子どもも参加する
(茨城県大子町)

んは、「大子漆の知名度

（水戸支局 大林広樹）